

県立西都原考古博物館中期運営ビジョン評価表（令和元年度）

※評価欄の数値は4段階評価

内部評価 4 … 達成できた 3 … ほぼ達成できた 2 … あまり達成できなかった 1 … 達成できなかった
 外部評価 4 … 期待以上できた 3 … ほぼ期待どおり 2 … やや期待を下回る 1 … 改善が必要

(1) 調査研究

項目	評価指標	目標値	令和元年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容(良点○ 課題●)及び改善策(今後に向けて※)	個別	総合	評価・意見	評価
調査研究	論文等の執筆、研究発表等	年1回以上	学芸普及担当の職員が年1回以上の執筆・発表を行った	<ul style="list-style-type: none"> 松林 論文等1本 発表等3回 田中 論文等1本 発表等0回 堀田 論文等5本 発表等2回 松本 論文等3本 発表等1回 加藤 論文等2本 発表等1回 永友 論文等1本 発表等1回 留野 論文等2本 発表等0回 <p>○ 当館の調査研究活動の柱として継続的に実施している地下レーダー探査では、西都原古墳群の鷺田支群のほか、延岡城跡（延岡市）、日向国府跡（西都市）、下北方古墳群（宮崎市）、築池地下式横穴墓群・高城町古墳（都城市）、島内地下式横穴墓群（えびの市）などを対象に行った。その結果、柱穴などの遺構や、地下式横穴墓の有無・分布範囲など、遺跡の保存に資するデータが得られた。</p> <p>○ 平成27年度から参加している「古代歴史文化協議会共同研究事業」では、第2期事業として「古墳時代の刀剣類」がスタートし、県内における古墳時代の刀剣類について集合作業を開始した。これまで刀剣類の集積が行われたことはなかったが、1月に開催された第11回研究集会の段階では、事業に参加している14県の中でも、奈良県・岡山県について3番目となる800点を超える点数の刀剣類が出土していることが明らかとなった。</p> <p>○ 特別史跡西都原古墳群史跡整備推進事業に伴う115号墳（円墳）の発掘調査では、大正調査の再検証、墳丘構造の解明、地下式横穴墓の有無の確認を目的としてトレンチを設定した。その結果、墳丘の規模や構造、葺石の積み方が判明した。また、第1支群の横穴墓群について、新たに1基のくさび形を呈する横穴墓の墓道（5号墓）を確認した。</p> <p>○ 2015・2017（平成27・29）年度に発掘調査を行った西都原101号墳について、発掘調査成果に基づいた墳丘復元工事を実施した。工事は2018・2019（同30・令和元）年度の2か年にわたって実施する計画である。</p> <p>○ 当館において調査・研究の柱と位置づけている国際交流に関しては、現在、台湾新北市立十三行博物館・韓国国立羅州博物館の二館と学術文化交流協定を締結し、共同調査研究や職員の人的交流などの交流を行った。</p> <p>※ 学芸普及担当職員については、韓国、台湾の博物館との学術文化交流協定や、14県の連携による「古代歴史文化協議会共同研究事業」など、国内外の機関との連携に基づいて研究者間の交流を図り、各自の調査研究を進める。その成果は特別展・国際交流展等の展示会に還元するとともに紀要や各種研究会において公表する。</p>	—	4	<p>(1) 調査研究は、考古学に特化した、たえず成長し発展する博物館の原動力になると共に、一般市民に興味関心を持たせる公開・発表の工夫・講座開設も大切に思われる。</p> <p>(2) 西都原古墳群の調査、地中レーダー探査、実験考古学の工夫など個々によく努めておられると感じる。ただ改善策（今後に向けて）の第一にあげておられる台湾・韓国との交流協定・研究者間の交流については、コロナ禍のなか工夫が必要であり、その策を知りたかった。</p> <p>(3) 多忙な業務のなかで、学芸員諸氏の懸命な調査研究に対して敬意を表したい。</p>	3.9

(2) 収集保存

項目	評価指標	目標値	令和元年度実績 ()内は昨年度	内部評価			外部評価	
				評価内容(良点○ 課題●)及び改善策(今後に向けて※)	個別	総合	評価・意見	評価
鉄製品・ 古人骨・ 土器・石器等	鉄製品の 保存処理 件数	年50件 以上	56件 (66件)	<ul style="list-style-type: none"> 鉄製品 内部処理 53点 外部委託処理 3点 計 56点 <ul style="list-style-type: none"> 鉄製品については、本館の保存処理機能を活かして西都原111号墳出土挂甲小札と百塚原古墳群(西都市)出土馬具類の保存処理を継続して行った。また、外部委託により本庄地下式横穴墓群(国富町)出土鉄刀や灰塚地下式横穴墓群(えびの市)出土鉄鏃など3点の保存処理を実施した。 古人骨に関しては、島内地下式横穴墓群(えびの市)、旭台地下式横穴墓群(高原町)などの出土人骨について補修・点検を行い、その他に獣骨の整理も進めた。 西都原101号墳・115号墳・265号墳・第1支群横穴墓群の整理作業を実施したほか、101号墳出土短甲形・蓋形埴輪、延岡市葎田窯跡出土資料の修復作業も実施した。また、土器・石器の収蔵棚整理と資料のデータベース化を目的として、収蔵資料の再チェックとコンテナの再整理を行った。 <p>※ 今後も博物館の基本的業務である「資料の収集・保存」を適切に行い、館内外の活動への積極的な活用を図っていきたい。</p>	4	4	(4) 全国随一の質と量を誇ると言われる鉄製品と古人骨にもう少し焦点を当ててみてはどうだろうか。 (5) 目標の数値にあまりにこだわらないことを望みたい。 (6) ホームページの資料検索は良く出来ているが、各項目の冒頭に資料の概要(例えば総数や出土遺跡の分布図など)を入れると、より分かりやすいものになるのではないだろうか。	3.9
				<ul style="list-style-type: none"> 図書登録数(冊数) 826件 写真登録数 1,584件 計 2,410件 <ul style="list-style-type: none"> 登録図書の内訳は、各研究機関が刊行した一般寄贈図書813件、個人による寄贈本9件、および購入本4件となっている。 写真については、発掘調査の記録写真フィルムをスキャンし、デジタルデータ化する作業を継続して行っている。今年度は西都原古墳群(西都市)、島内地下式横穴墓群(えびの市)、菓子野地下式横穴墓群(都城市)の写真を中心に登録を行った。 				

(3) 展示

項目	評価指標	目標値	令和元年度実績 ()内は昨年度	内部評価			外部評価	
				評価内容(良点○ 課題●)及び改善策(今後に向けて※)	個別	総合	評価・意見	評価
入館者	入館者数 (本館+古代 生活体験館)	年12万人	93,956人 (109,559人)	<ul style="list-style-type: none"> ● 入館者数は昨年度より減少した。新型コロナウイルス感染拡大に伴う臨時閉館の影響はあるが、令和2年1月末までの比較でも6,219人減少し、前年比93%にとどまった。 <p>※ 引き続き、一人でも多くの方に来館していただけるように、興味・関心を喚起し、感動を与えられる展示を行っていきたい。</p>	-	3	(7) 休館の影響はあったものの10万名の入館者が無かったことは、期待以上とは言い難い。 (8) 入館者数は目標値を下回ったが、交通の不便な立地としてはよく頑張っているほうだと思う。まずは交通の便の改善を望みたい。 (9) 内部評価にもあったように、来館者が年々減少しているのは気になる。展示会のあるたびに訪れるが、館内に人影が少なくもったいないと感じる。考古好きのみならず広く県民一般の興味にも応えるような展示会の展示の内容・手法・演出が期待される。 (10) 常新展示をなさっておられるのであろうが、マイナーチェンジのためインパクトが薄い。工夫の余地があるのではなかろうか。 (11) 「博物館運営の基本方針」の2番目に位置する常新展示の方針に共感する。本年は、コロナ対策で展示物に触れることは出来なかったことは残念であったが、考古に詳しくない者にとっても興味をそそるものであった。反面、常設展示の概念を廃止するのであれば、考古に精通する者から展示の整合性に疑念を抱かれないように熟慮することが必要と感じた。	3.3
特別展	実施回数	年1回	年1回 (年1回)	<ul style="list-style-type: none"> ① 特別展「埴輪のある風景 ～日本遺産「南国宮崎の古墳景観」と埴輪～」 <ul style="list-style-type: none"> ・期間：2019(令和元)年7月13日～9月8日 ・会期中入館者数 16,118人 ・展示資料 104点 古墳を構成する重要な要素の一つであり、古墳時代前期から後期にかけて日本列島各地で用いられた埴輪について紹介した展示会。 南九州の埴輪を中心に上げ、畿内地方や関東地方の埴輪との比較を通じ、南九州の埴輪やそれらが樹立された古墳の位置づけについて考えた。 <p>【参考：平成30年度】「共に生きたもの ～ムシと動物の考古学～」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・期間：2018(平成30)年7月14日～9月9日 ・会期中入館者数 21,721人 				

国際交流展	実施回数	年1回	年1回 (年1回)	<p>② 国際交流展「台湾 宜蘭 洪武蘭遺跡 ～海路の交わるところ～」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・期間：2019（令和元）年10月5日～12月8日 ・会期中入館者数 18,212人 ・展示資料（台湾資料111件、国内資料78件） <p>○ 台湾と日本を結ぶ南島航路でもたらされた可能性のある資料を通じて、台湾と南九州の繋がりについて考える展示会であり、台湾の洪武蘭遺跡出土の資料と、日本列島出土の貿易陶磁器を取り上げて、15～19世紀における東アジアにおける社会と交易の変化について考える機会とした。</p> <p>○ 台湾宜蘭県立蘭陽博物館と宜蘭県政府文化局の協力を得て、台湾を代表する遺跡の一つである洪武蘭遺跡の出土品を、日本で初めて展示することができた。</p> <p>○ 台湾では鉄器の保存処理技術が普及していないため、台湾国内でも展示する機会がほとんどなかった洪武蘭遺跡出土の鉄製品について、当館で保存処理を行い展示をすることができた。 また、鉄製品の保存技術およびその方法について、宜蘭県政府文化局に紹介することができたことから、台湾国内において鉄製品保存処理技術が広がる契機になることが期待される。</p> <p>○ 県内関連資料については、洪武蘭遺跡でも出土している陶磁器と同様な時期である15～19世紀頃の陶磁器を展示することで、東アジアの社会的情勢の変化とともに、南九州～台湾～中国を結ぶ南島交易の可能性とその状況について紹介することができた。</p> <p>○ 蘭陽博物館から講師を招いて展示資料のレプリカ制作を行うことで、展示と直接関係した体験講座を開催することができた。</p> <p>【参考：平成30年度】 「海山に宿る神々 ～日韓の祭祀遺跡～」 ・期間：2018（平成30）年10月6日～12月2日 ・会期中入館者数 15,825人</p>	-	<p>(12) 評価の高い調査研究とその常新展示の運営方針に則って、展示が今以上に刷新されることを期待する。ただし、どこかに、古墳やその時代に興味を持ち始めた子どもや成人が、納得いく説明の工夫もお願いしたい。専門性に特化することは否定はしないが、近辺に実物があるだけに、興味心が容易に入り込める解説もお願いしたい。</p> <p>(13) 特別展や国際交流展、企画展、どれも素晴らしい内容であった。特に国際交流展「台湾 宜蘭 洪武蘭遺跡～海路の交わるところ～」は台湾と南九州のつながりがよくわかる展示であった。職員の方々の努力がうかがえる。</p> <p>(14) 特別展等における日本列島の中での南九州の地域性や東アジアにおける位置づけは、今後とも追究していく必要がある。</p> <p>(15) 展覧会において、館入口ホールの導入展示→メイン展示→出口に近いステージ展示と流れをつくっているのはよい。毎回、ステージ展示が何を見せてくれるか楽しみである。当年度は、「炎が生み出すもの」展の「古代製鉄復元実験の概要」が意外におもしろく、古代の製鉄技術に近づこうとする試みにわくわくした。映像化していれば、いろいろと生かせそう。2月には、館による埴輪の野焼き復元の試みもあったが、実験考古学は宝の山かもしれない。また、「漆黒の輝き 赤の祈り」展ステージ展示の歴史学や民俗学など文化的広がりのある視点にも意外性と楽しさを覚えた。</p> <p>(16) 国際交流展「台湾 宜蘭 洪武蘭遺跡～海路の交わるところ～」は、台湾山岳の少数民族と西日本は照葉樹林文化圏に属し、共通する文化を保持するという意識で観覧した。遺跡は海岸近くで高地山岳ではなかったこと、15世紀～19世紀で日本の室町～江戸時代に相当し新しかったこと、日本出土、台湾出土の陶器の共通性から南九州・台湾の交易という視点で構成とされていたが、中国と日本、中国と台湾の交易と受け取った。</p> <p>(17) 国際交流展の開会式に参加させていただいたが、大変興味深く、関係者の方々の思いを感じ取ることができた。実際に見て聴いて知るのが展示の良さだと考えると、PR等のあり方（例えばTVなどをフル活用していくなど）を考えないと、とてももったいないと感じた。</p> <p>(18) 「台湾 宜蘭 洪武蘭遺跡」展では、はじめて目にする遺物に目を見張り、遺跡を通して台湾の歴史までも学べて有意義であった。ただ、どの国際交流展についてもいえることだが、対象遺跡と南九州との関連性を知りたいと思う。例えば、洪武蘭遺跡と南九州についてなら、当時の航海ならどんな船、どんなルートで何日かかったかなどを示すことで、「つながり」のイメージがより明確になるのではないか。</p> <p>(19) 企画展「漆黒の輝き 赤の祈り ～ウルシの考古学～」は興味深い企画であった。漆は縄文時代早期には使用されたいが、現在も日本を代表する伝統文化として世界に知られている。 30年位前、平塚市の縄文遺跡にキツネノカミソリの球根が出土していることを知った。キツネノカミソリは彼岸花の仲間でも有毒、現在の平塚辺りに棲んでいた縄文人はキツネノカミソリを食していたと想像するが、その技術は伝わっておらず活用についてのコメントはなかった。椎葉村尾前では救荒食としてキツネノカミソリを食する技術が伝承している。球根を灰汁でどろどろになるまで数時間炊き、さらに流水で一晩晒しさらに炊いて団子にする。オオシダゴと言って塩をつけて食べたそうだが、筆者には蜜でたべさせて貰った。 考古学で解明できないことを民俗学に求めることに関して、『伝承された縄文技術』において「民俗考古学」が提唱されていた。考古学は遺物を基に考証するものであろうが、風俗、技術、文化など無形のものは民俗学へ眼を向けることの提唱であったと思う。企画展「漆黒の輝き 赤の祈り」は、もしかすると民俗考古学の一步なのかと思った。</p>	3.3
企画展	実施回数	年2回	年2回 (年2回)	<p>③-1 企画展Ⅰ「炎が生み出すもの ～古代日向の鍛冶と鉄～」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・期間：2019（平成31）年4月20日～2019（令和元）年6月16日 ・会期中入館者数 16,588人 展示資料240点 <p>○ 本県出土の弥生時代から古代までの鍛冶関連資料を通じて、どのような鍛冶技術が使用され、そして変化していったのかを紹介した展示会である。</p> <p>○ 通常の展示会で中心となることが稀である鉄滓を数多く展示し、鉄滓と鍛冶技術の関係について学ぶ機会とした。</p> <p>【参考：平成30年度】 「石が人を創った～石と人の文化史～」 ・期間：2018（平成30）年4月21日～6月17日 ・会期中入館者数 21,309人</p> <p>③-2 企画展Ⅱ「漆黒の輝き 赤の祈り ～ウルシの考古学～」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・期間：2020（令和2）年1月11日～3月15日 ※新型コロナウイルス感染防止のため3月5日以降は臨時休館 ・会期中入館者数 8,264人 ・展示資料 64点 <p>○ 日本を含む東南アジア、東アジア等で発展し、日本列島では縄文時代早期・前期には塗料として櫛・器など道具の装飾や、接着剤として道具の接合などに利用されてきた漆を利用する文化を紹介する展示会。</p> <p>○ 縄文時代から現代まで通観し、各時代に特徴的なトピックを漆に関する出土資料と結びつけ、九州を中心とした多種多様な漆の文化について紹介できた。</p>	-		

企画展	実施回数	年2回	年2回 (年2回)	<p>○ 考古学に限らず民俗学的な観点からも、幅広い時代と地域のウルシ・漆利用について、最新知見を紹介する機会を提供できた。</p> <p>○ 関連講座における新たな試みとして、西米良村語り部の会から会員を招聘し、漆にまつわる民話の語りを、講座の冒頭で実演して頂き、アンケートでも好評を得られた。</p> <p>【参考：平成30年度】「どきを編む ～宮崎県の縄文土器～」 ・期間：2019（平成31）年1月12日～3月17日 ・会期中入館者数 11,669人</p>			
コレクション ギャラリー 展	実施回数	年3回	年4回 (年4回)	<p>④-1 コレクションギャラリー展① 「文化財を守る 伝える ～文化財保存の歴史～」</p> <p>・期間：2019（令和元）年6月19日～7月7日 ・会期中入館者数 2,842人 ・展示資料 11点</p> <p>【参考：平成30年度】 「西都原台地の歴史Ⅰ 旧石器時代」 ・期間：2018（平成30）年6月20日～7月8日 ・会期中入館者数 3,489人</p> <p>④-2 コレクションギャラリー展② 「文化財を守る 伝える ～文化財の保存環境～」</p> <p>・期間：2019（令和元）年9月11日～9月29日 ・会期中入館者数 5,765人 ・展示資料 25点</p> <p>【参考：平成30年度】 「西都原台地の歴史Ⅱ 縄文時代」 ・期間：2018（平成30）年9月12日～9月30日 ・会期中入館者数 4,238人</p> <p>④-3 コレクションギャラリー展③ 「文化財を守る 伝える ～文化財を守る技～」</p> <p>・期間：2019（令和元）年12月11日～2020（令和2）年1月5日 ・期間中入館者数 2,969人 ・展示資料 18点</p> <p>【参考：平成30年度】 「西都原台地の歴史Ⅲ 弥生時代」 ・期間：2018（平成30）年12月5日～2019（平成31）年1月6日 ・会期中入館者数 2,973人</p> <p>④-4 コレクションギャラリー展④ 「文化財を守る 伝える ～災害と文化財～」</p> <p>・期間：2019（平成31）年3月28日～4月12日 ・会期中入館者数 2,235人 ・展示資料 6点</p> <p>【参考：平成30年度】 「西都原台地の歴史Ⅳ 古墳時代とその後」 ・期間：2019（平成31）年3月18日～4月14日 ・会期中入館者数 8,840人</p> <p>⑤ 通年企画展示「西都原古墳群の最新調査」</p> <p>・内容：西都原170号墳出土の船形埴輪に関して、発掘調査に基づく最新の成果を紹介した。</p>	-	(20)「漆黒の輝き 赤の祈り」展において、スロープ入口付近の装飾や展示室ガラスケースの下敷きとして和紙が使われていたのは新鮮で目を引いた。日本文化の代表つながりで採用されたと推察されるが、こうした演出は「おもてなし」の一環ともなり、観光施設の側面もある当館としては毎回工夫したいところである。	3.3

(4) 情報発信

項目	評価指標	目標値	令和元年度実績 ()内は昨年度	内部評価		外部評価		
				評価内容(良点○ 課題●)及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
広報活動の充実	情報提供回数	年12回以上	年21回 (年19回)	<ul style="list-style-type: none"> 報道機関への情報提供 展示会(7回)、講演会・考古博講座(7回)、体験・実験講座(6回)、考古博少年団(1回) ○ 上記のほか、特別展や企画展の会期前・会期中に、担当職員がテレビ・ラジオに出演して見どころを紹介し、PRを行った。 ○ 10月5日から14日までの10日間、宮崎市内の大型商業施設で、国際交流展への誘客を目的としたポスター掲示を行った。 ○ 11月から宮崎市内のホテル、宿泊施設6か所と、宮崎市および児湯郡内全市町村の生涯学習主管課、中央公民館等の生涯学習施設11か所を訪れて、当館の展示と体験学習メニューの説明を行い、個人・生涯学習等団体の利用についてPRを行った。 ○ 12月に宮崎県福岡事務所にて、北部九州地域における広報活動の支援や公共の場でのチラシ等の設置を依頼した。 ○ 国際交流展と企画展Ⅱの関連講演会・講座の開催前のタイミングで、新聞広告による告知を行った(10月・2月)。講演会後に実施したアンケートによれば、10月については総回答者35名中18名(51%)、2月では46名中10名(22%)が情報源として新聞広告を挙げ、10月の「初めて参加した」17名中12名(71%)が新聞広告を参加の契機と回答しており、当館の講演会・講座の認知度向上と新規来館者の開拓につながったと判断している。 	—	4	<p>(21) 広報活動において、宮崎市内および児湯郡内の全市町村の生涯学習課や中央公民館等へ出向き説明がなされたのは、今後の入館者の増加につながるのではないだろうか。</p> <p>(22) 広報活動は、様々な機会・手段をとらえて行われている。報道機関も含めて双方向での情報発信が出来るようにしたいものである。</p> <p>(23) 職員の方がテレビ・ラジオに出演したり、チラシ配布したり、新聞広告の告知をしたりと、今回は広報活動が充実していたと思う。皆さんの意気込みが感じられる。</p> <p>(24) 評価指数としているホームページやFacebookの更新回数は目標を大きく上回っているが、このことの評価に止まらず、その効果についても検証していく必要がある。利用者へのアンケート等を通して、年代や性別によって、どのような広報手段に効果があるのか等を分析することで、広報の方法を工夫し、利用者の拡大に繋げて欲しい。</p> <p>(25) 展示が評価3なら、情報発信も評価3とするのが理に適う。両者は一体で、来館者の少なさは情報発信の効果が薄かった結果ととらえられる。館長から学芸普及担当までオール営業パーソン！ くらいの勢いで館の売り込みに注力していただきたい。</p> <p>(26) 11月15日、新聞にカラーで「台湾 宜蘭 淇武蘭遺跡」展の広告が掲載された。費用対効果が気になるところだが、事業報告によると、広報効果が高かったと分析されている。広報にかかる人員の少なさをカバーする一手となりそうだ。</p> <p>(27) いままで一度もcollection gallery展を訪れたことがない。いったいどこで開かれているのだろうか。</p> <p>(28) 考古博が行う一般向けの各種業務(展示・講座・体験実験・考古少年団)に関する情報提供をメディアに積極的に行うほか、ホームページやフェイスブックなどインターネットをつうじて国内外に発信する姿勢に共感する。ただ、これも目標値にあまりにこだわらないようにしていただきたいと思う。</p>	3.6
博物館ホームページの充実	更新回数	月2回以上	年55回更新 (年50回更新)	<ul style="list-style-type: none"> 博物館ホームページの更新回数 ホームページ 年 55回の更新 その他、Facebook 年 86回の更新 ホームページの総ページビュー数 年343,842人 <p>【参考：平成30年度】 279,086人</p>				

(5) 教育普及

項目	評価指標	目標値	令和元年度実績 ()内は昨年度	内部評価		外部評価		
				評価内容(良点○ 課題●)及び改善策(今後に向けて※)	個別	総合	評価・意見	評価
生涯学習の一環としての教育普及活動	講演会・講座の実施回数	年15回以上	14回実施 (16回実施)	<ul style="list-style-type: none"> 講演会 … 年2回(特別展関連7月、国際交流展関連10月) 考古博講座 … 年4回(5月、8月、11月、2月) 体験・実験講座 … 年6回(6月、9月、10月、12月、1月、2月) 小中学生対象講座 … 年1回(7月 考古博少年団員+小学生1名) 考古博物館少年団 … 1件(年間8回活動) ※ただし2月(土器の野焼き)と3月(解団式)の2回は中止 団体予約件数 … 290件 <p>【参考：平成30年度】 338件</p> <p>○ 2回の講演参加者のアンケートでは、7月は94%、10月は80%の方が内容に関して「満足」および「おおむね満足」と回答した。</p> <p>○ 講演会・考古博講座については、アンケートの結果、85~95%の方が「満足」および「おおむね満足」と回答している。</p> <p>● 新型コロナウイルス感染拡大防止のため、3月に予定していた考古博講座の最終回と考古博少年団の解団式は中止となった。</p> <p>● 団体予約件数の減少は、2月以降のキャンセルによるところが大きい。</p>	—	3	<p>(29) 講演会、考古博講座でのアンケートで満足度が高い事からみて、とにかく入館してもらう機会をつくる事が大事である。それによって必ず発見や気付きがある。</p> <p>(30) 西都商業高校と取り組まれたことは、他の校種等にも広げたいものである。西都市、児湯郡各町村、宮崎市教委等をまきこんでの学校教育との連携を模索したい。</p> <p>(31) 「教育普及」でも、課題や考察のような分析は示されているが、取り組みは明確でない。そちらに出向くことができなければ、どうすれば興味関心を持ってもらえるのかなど、考える必要を示していただけるとよかった。</p> <p>(32) 昨年度に引き続き本年度も、新型コロナウイルスの影響は免れないだろうが、感染拡大防止策を徹底することや、HPやSNSなどを含めた情報発信によって、教育普及に努めていただきたい。</p> <p>(33) 体験・実験講座の参加者が年々増えているのは喜ばしい。当年度の事業計画を知って期待感があつたが、期待どおりの結果となった。魅力的な内容とコピーで、広く県民の関心を引き寄せたい。</p> <p>(34) 多様な活動に敬意を表したい。とくに、学校教育との連携は他に例のない先進的な取り組みと思う。しかし、なかなか参加者の増加がみられないのは、前例のない取り組みのためと考える。これからも多くの情報を発することによって事態が進展する可能性があるだろう。一層のご努力を期待したい。</p>	3.4
学校教育との連携	講演会・講座の実施回数	年15回以上	14回実施 (16回実施)	<ul style="list-style-type: none"> 小中学生対象講座(7月 考古博少年団員+小学生1名) 大学生学芸員課程博物館実習(8~9月 1校:参加者1名) 大学生インターンシップ(8月 5校:参加者5名) 専門学校生インターンシップ(7月 1校:参加者2名) 高校生インターンシップ(10月 1校:参加者3名、12月 1校:参加者3名) ※8月は、「県庁インターンシップ」の一環として実施 中学生職場体験(7月 2校:参加者3名) 県立西都商業高校による「課題研究」(6~10月) 生徒が班に分かれ、当館で勾玉製作の工程を習得した後に、勾玉づくりのイベントを実施したり、3階ラウンジでオリジナルパフェを商品化するなどの実習を行った。 県立児湯るぴなす支援学校による「こゆるぴなす アートフェス」の開催(2月) 当館ロビー(ホール前)の壁や空間を活用して絵画、写真など生徒の作品を展示した。 学校関係の予約件数 … 110件 <p>【参考：平成30年度】 134件</p> <p>● 学校関係の予約件数が減少傾向にある。</p>				

(6) 経営

項目	評価指標	目標値	令和元年度実績	内部評価		外部評価	
				評価内容(良点○ 課題●)及び改善策(今後に向けて※)	個別	総合	評価・意見
県民等からの意見の反映	-	-	-	<ul style="list-style-type: none"> ○ 館内4か所にアンケートブースを設置しており、昨年度は690件の有効回答があった。11月をアンケート月間として回収強化に努め、回答内容の分析を行った。 ※ 順路が設定されていないこと、展示室の照明が暗いことに関して、否定的な意見が寄せられている。この点については、受付での対応や館内での解説などの機会をとらえて、本館の施設の特徴や展示のねらいについて十分に説明を行うこととしている。なお、展示室内が暗いことで安全面の配慮が必要と考えられる来館者には、受付において注意喚起を行うなどの対応をとっている。 	4	3	<ul style="list-style-type: none"> (35) 展示室案内図がボランティアスタッフによって良く作られている。矢印をもっと大きくわかりやすくして、それをもとに案内板をつくるのもよいと思う。 (36) 照明を落としている意図は理解するが、明るい屋外から入ってきた入館者は、内部の者が感じるよりもかなり暗く感じるであろう。暗さに順応できる空間を設けるなどの工夫が考えられる。否定的意見が多い場合には、それなりの理由があるので、説明しなくても理解してもらえるよう対策が必要ではないか。 (37) 昨年度の外部評価の際にも、同じ意見を述べさせて頂いたが、この項目については、評価指数と目標値の設定がないため、客観的な評価が困難である。当該項目は、施設の運営の充実を図っていく上で、いずれも重要な取組みが掲げられているため、次期ビジョンを策定する場合には、ぜひ目標値の設定等について、ご検討頂きたい。 (38) 昨年度内に実施できなかった防災訓練については、早期の実施を希望する。 (39) 「職員の資質向上」が評価3であるにもかかわらず、評価4にするための取組が示されておらず、評価しづらかった。 (40) NPO法人iさいとや西都原ボランティア協議会と共同・協力してガイドボランティア養成連続講座を開く、ボランティア募集のパンフレットを配布するなど、運営支援業務を強化したのは評価できる。NPOやボランティアの支援なくして当館、ひいては西都原古墳群の盛り上がりなし、と改めて思う。
県民等との協働				<ul style="list-style-type: none"> ○ NPO法人(iさいと)と協力して、ミュージアムコンサートや「銅鏡チョコをつくってみよう!」体験(2月)、「はにわコンテスト」(8月)、「西都原 秋のお茶会」(10月)などのイベントを開催した。 ○ 9月に地元の音楽イベント「BRASH」が当館の隣接地で開催され、若い方を中心とする多くの観客でにぎわった。会場内には県内クラフト作家による「博物館 de マルシェ」や乗馬体験、当館の勾玉制作ブースなどが設けられ、これまで当館にあまりなじみなかった客層に向けて当館の認知度を上げる機会となった。 ※ 今後も、NPO法人、西都原ボランティア協議会や西都市・児湯郡の関係団体と連携し、地域の方々に認知され、活用していただける施設となるように努めたい。 	4		
職員の資質向上				<ul style="list-style-type: none"> ○ 全職員を対象とするコンプライアンス、人権、情報セキュリティ、交通安全の館内研修を実施し、交通安全研修(5月)や人権教育行政担当者研修(6月)などの庁外研修に参加した。 ○ 専門分野では、学芸普及担当職員が古代歴史文化に関する共同調査研究の研究会(8月・1月)や、第9回文化財IPMコーディネーター資格取得講習会(12月)、第2回宮崎県博物館協議会研修会(2月)など、県内外で行われた研究会に参加した。 	3		
危機管理体制の強化				<ul style="list-style-type: none"> ○ 年度初めに危機管理マニュアルを全職員(県職員、NPO、ボランティア、委託業者)に配付し、危機管理意識の向上を図った。 ○ 11月に南海トラフ巨大地震を想定した県民一斉防災行動訓練に参加し、館内での安全確保行動に係る訓練を実施した。 ○ 1月に県が主催する普通救命講習を職員2名が受講し、AEDの使用方法や応急手当の知識や技能を習得した。 ● 3月に、地震及び地震による火災発生等の有事に際して来館者・職員等が無事に避難できるように、通報・初期消火・避難誘導等の要領を習得することを目的として、館関係者(職員、NPO、警備・清掃・中央監視スタッフ)の防災訓練を計画したが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止に係る臨時休館により中止となった。 ● 防災訓練に加えて、NPO法人(iさいと)と共催で救命法講習を実施する予定としていたが、こちらも中止となった。 ※ 職員一人一人が、常日頃より危機管理意識を持つておく必要があるため、今後も訓練や研修・講習を通じて職員の防災・危機管理に対する意識の高揚に努めていく。 	3		

<p>施設・設備 の管理</p>	<p>—</p>	<p>—</p>	<p>○ 施設・設備の保守業務等は、警備業務、清掃業務、空調自動制御機器保守業務、環境整備業務など年間30件以上におよぶ契約を外部に委託し、維持管理に努めた。</p> <p>○ 施設・設備の老朽化が進み、更新時期をむかえているものもあるため、計画的な修繕・改修に努めた。小規模な修繕については予算の範囲内でその都度行ったが、大規模な修繕については膨大な予算を伴うため関係機関と協議を行いながら、計画的な修繕・改修に努めている。令和元年度に修繕を行った設備は、浄化槽、空調用自動制御機器を含む空調機器、エレベーター等である。</p> <p>※ 関係機関と連携を図り、年次整備計画に基づきながら効率的な修繕改修を行う。</p> <p>● 酒元ノ上横穴墓遺構保存覆屋の屋根がシロアリの被害にあい、平成30年度から閉館の措置をとっている。</p> <p>※酒元ノ上横穴墓遺構保存覆屋に関して、現時点で屋根改修の実施設計は完了しているが、工事の前提となる全体計画について、文化庁と協議を行っている。なお、緊急性が高い遺構の養生工事については今年度中に実施する。</p>	<p>3</p>	<p>3</p>	<p>(47) 評価3にもかかわらず、●の課題が示されていない項目もある。新型コロナウイルス感染症はやむを得ないことなので、コロナによる課題を次回にむけた課題としてしめすのではなく、他に考えるべき課題がなかったのか少々疑問に感じた。</p> <p>(48) 全体を通して、良点(○)は並ぶが、課題が前回より少ない。一昨年より内部評価は高くないのにである。 さらに改善策(今後に向けて※)無記載の項目が複数みられる。このような評価活動を行うならば、「今後に向けて」は(1)～(6)全項目に必要であろう。</p> <p>(49) 令和元年度は、本ビジョンの最終年度となっているため、単年度の評価と併せて、次期ビジョンの参考に資するため、本ビジョンの期間5年間を総括した評価も行うことが望ましいと考える。</p> <p>(50) 開館・閉館時刻をみると両館で30分違う。館それぞれに事情があって設定されたと思われるが、同じ県立博であるから統一した方が良いのではないかと思う。</p>	<p>3.2</p>
----------------------	----------	----------	---	----------	----------	--	------------